

歌舞伎作品の歴史叙述—虚構と真実の世界—

胡 光（愛媛大学法文学部教授）

A Historical Description of Kabuki Plays - World of Truth and Fiction

Hikaru EBESU

Professor, Faculty of Law and Letters, Ehime University

はじめに

四国遍路・世界の巡礼研究センターの平成28年度公開講演会において、河合眞澄氏の「歌舞伎の中の巡礼」を拝聴した。歌舞伎や淨瑠璃作品は、作者が創作したフィクションであり、そこには「虚構と真実」の世界がある。「虚構」とは「虚偽（ウソ）」ではなく、「真実」も「事実（史実）」ではない。一方で、「虚構」は起こりうるかもしれない「仮説」であり、「真実」は人々が追い求める「真理」であり、その過程が歴史であるとも考えられる。例えば、歌舞伎『四国辺路』は見聞した実話をもとに創作された「虚構」であり、弘法大師は約1200年前に四国遍路を開創し、永遠の瞑想を続けているという信仰の上での「真実」が長く語られてきた。そこに、感動があり、「現代」（制作当時の近世社会）を生きる知恵も生まれてくる。すなわち、歌舞伎のなかの「虚構と真実」は、近世社会を映す鏡と言える。以上を前提として本稿では、河合氏の講演を参照し、提示された歌舞伎や淨瑠璃作品を「史料」として、四国遍路の歴史叙述を試みてみる。

1 四国辺路と修行的要素

まず気になったのは、四国遍路の表記である。近年の歴史研究において、四国遍路の成立過程は、平安時代に登場する僧侶などの「辺地修行」をその原型とし、その延長線上に鎌倉・室町時代の「四国辺路」を捉え、八十八ヶ所の確立とともに庶民化した「四国遍路」の成立を見る、「辺地修行」から「四国遍路」へという二段階成立説が定着している。さらに、四国霊場が八十八ヶ所の札所に限定されてくる過程において「四国辺路」が「四国遍路」へ変化し、その背景には修行から巡礼へという四国遍路の性格の変遷と大師堂が普及するなどの弘法大師信仰の拡大があると捉えて、表現の変化と信仰の変化が連関する重要性が指摘されてきている。

紹介された作品ではまず、元禄4年（1691）京都初演、絵入狂言本の表題が『四国辺路』であり、座本の口上にも「四国辺路の順礼」とある。貞享4年（1687）に大坂で刊行された初めての案内本である真念『四国辺路道指南』によって、四国遍路の庶民化と大師信仰の拡大が進むことになるが、早くも四国遍路を演目とした歌舞伎が上演されたこと、当初は「辺路」と表記されていたことが確認できる。さらに、天理図書館本の表紙題箋には「四国邊路」という、古い字体が用いられており、修行色を強く残す四国遍路の状況（イメージ）が反映されている。

次に、宝暦12年（1762）大坂初演、『竹籠太郎怪談記』でも土佐の真念庵の場面において、「辺路の道者、式三人」の記述がある。前作品から70年を経た宝暦年間においても「辺路」の文字が用いられ、「道者」という言葉には、一般的な巡礼者ではない修行者であることが表されている。

一方、河合氏が以前紹介した、正徳4年（1714）大坂初演、淨瑠璃『後嵯峨天皇甘露雨』においては、二人の女性が「四国へんろ」「四国遍路」をするという表現が登場する。

前述『竹籠太郎怪談記』が登場したころ、宝暦13年（1763）には、初めての案内図『四国徳礼図』が細田周英によって大坂で刊行された。本図には、八十八の札所と遍路道が描かれ、中央には、弘法大師像とともに八十八箇所の由来が説かれる。四国を「発心」「修行」「菩提」「涅槃」の四つの道場に例える原点が見られ、四国が四重十界の曼荼羅であり、八つの蓮弁からなっているとする。これによって、八十八の仏閣が定められ、弘法大師の加護を受けながら、仏法の世界・曼荼羅の世界である四国で仏に出会うよう誘う。「徳礼」の表記にも象徴されるように、弘法大師の遺跡を巡礼することが広く喧伝されたのである。

歌舞伎作品の表現からも、18世紀前半には修行的「辺路」から巡礼的「遍路」へという変化が見られ、案内図が出された宝暦期を含む18世紀前中期は移行期ではないかと考えられる。なお、幕末まで刊行が続く真念『四国辺路道指南』の表題も「徳礼」「遍路」へと変遷する。

2 四国遍路案内本の影響

大坂で初めて刊行された四国遍路案内本である真念『四国辺路道指南』に続き、元禄2・3年（1689-90）には、寂本『四国徳礼靈場記』、真念『四国徳礼功德記』が刊行される。上方での遍路本刊行ブームとともに現れる、同じく上方で制作された歌舞伎作品には、これら案内本の情報が取り入れられたのではないかという点について、河合氏の研究事例の中から考察してみたい。

『四国徳礼道指南』奥書には、大師850年忌の春に宿願高まり、老若男女全ての人のために道案内をすることが記され、弘法大師信仰拡大と四国遍路の順礼化を志したことが分かる。同書前書には、遍路に必要なものとして「札はさみ板」があり、「南無大師遍照金剛」と記すよう指示している。弘法大師への信仰が強く表されており、巡礼のなかでは唯一の例である。

『四国辺路』の重要な脇役・八郎左衛門は、四国遍路中に出会った主人公おふさからの報謝に対して「なむ遍照金剛」と礼を言い、『竹籠太郎怪談記』では、土佐・真念庵に滞留した「辺路道者」が報謝に対して「南無大師遍照金剛」と感謝の言葉を述べる。「南無大師遍照金剛」の語が一般化していたことを知る。

『竹籠太郎怪談記』では、真念庵坊主が辺路道者に「篠山へかけるつもりなら、荷物をここに置いて行かっしゃれ。月山へかけるのなら、持って行たがよい。」と教える。『四国徳礼道指南』に「市野瀬村（略）に真念庵といふ大師堂遍路に宿かす（略）さゝやまへかけるときは此庵に荷物ををきあしすりよりもどる、月さんへかける時は荷物もち行（略）右両所の道あなひ真念庵にて尋らるへし」とあり、先の場面が思い浮かぶ。国境の山中にある篠山神社（愛媛県愛南町）と足摺岬より海岸沿いに進む月山神社（高知県大月町）は、現在も番外札所とされるが、江戸時代中期の遍路は必ず参詣する場所であった。37番岩本寺（四万十町）と「あしずり」38番金剛福寺（土佐清水市）の間にある真念庵（同市）において、「寺山院」39番延光寺（宿毛市）や40番觀自在寺（愛南町）も含めて、その順路が話題になっているのである。

さらに、『四国辺路』の八郎左衛門はおふさに「八十八か所を皆めぐりますれば、道のりが四百八十八里、川が四百八十八川、坂も四百八十八坂ござる」と教える。元禄元年（1688）に土佐一宮（一説には讃岐海岸寺）で刊行された案内本『奉納四国中辺路日記』（当センター所蔵）には「合八十八ヶ所、道四百八十八里、川四百八十八川、坂四百八十八坂」の記述がある。『四国辺路』の座本山下半左衛門の口上には、「此夏より四国をめぐり初秋のじぶんに下向仕ました」とあり、上演直前の元禄4年7～9月頃、四国遍路を行つたことを匂わせており、四国刊行の案内本との関連が注目される。

3 巡礼者の姿

歴史学における巡礼者の研究は、彼らが記した「道中日記」の分析が中心である。「道中日記」には靈場や道中の様子が新鮮な視点で綴られ、近世社会をよく伝えてくれる。しかしながら、自らの姿を詳細に記すことはなく、巡礼者の姿（特に四国遍路）は不明な点が多い。一方、歌舞伎作品は観劇されることが目的であるため、容姿の描写は必須であり、挿絵も豊富である。また、人気俳優や名場面の錦絵も数多制作され、その情報量は多く、明快に可視化する。さらに、生きている伝統文化である歌舞伎は、現在でも実際に見て確認することができるるのである。

まず、多数の作品がある西国巡礼者の姿から確認しよう。『伊賀越乗掛合羽』に「[お種] 箕摺、菅笠、杖、順礼の姿。[お袖] 同じく順礼の姿、杖、風呂敷包み少々負ひ、順礼歌にて出る」。『金門五山桐』の真柴久吉（羽柴秀吉）が「順礼の形リにて、箕摺を懸、笠を持、杓を頬杖にして」登場する。『傾城阿波の鳴門』のおつるは「箕摺も二親の有ル子じやによつて、両方は茜染」である。挿絵を見ても、箕摺、菅笠、杖を持つ巡礼の姿が確認でき、胸に納札を下げているものもある。

早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システムで、『金門五三桐』の真柴久吉を検索すると、幕末の錦絵が59件見ることができ、上記の巡礼姿に水色頭巾を被った久吉を確認することができる。その中で、豊国画、江戸・沢村長十郎配役の真柴久吉図は、唯一背中が垣間見られ、白い箕摺の身頃中央を茜色で染め、文字が書かれていることが分かる（表紙図版参照）。

宝暦6年（1756）初版『西国順礼手引案内』（当センター所蔵）には、納札・菅笠・箕摺の書き方が示され、19世紀中頃の『守貞漫稿』にも「父母ある者、左右茜染、片親ある者、中茜染、父母ともに亡き者は、全く白なり」とあり、歌舞伎・淨瑠璃作品の叙述が正確であることを知る。箕摺身頃の文字は「奉順礼西国三十三所」である。西国順礼の姿は、江戸時代の絵馬（園城寺など）にも描かれており、上記の習俗を見る

ことができる。さらに、身頃中央茜、両端茜の江戸時代の笈摺が今に伝わる（徳島県立博物館、三重県総合博物館所蔵）。

さて、現在も人気演目の一である『金門五三桐』（楼門五三桐）を見てみると、「石川や浜の真砂は尽きたとも、世に盗人の種は尽きまじ」と詠む久吉が現れる。その姿は、江戸錦絵そのままの伝統が受け継がれているが1点だけ違いがある。笈摺身頃の色が頭巾や小袖と同じ水色なのである。背景にある壮大な朱塗りの南禅寺山門によく映えるよう、茜色から水色へ演出変更がなされただけでなく、近年では茜色の笈摺をまとう習俗が失われてしまつたことも反映されているのであろう。

次に、作品中の四国遍路の姿はどうであろうか。『四国辺路』では、八郎左衛門とお長の命を笈摺が救い、挿絵にも笈摺姿が描かれる。『嵯峨天皇甘露雨』でも「肩に笈摺」の女性二人が遍路する。案内本『四国遍路道指南』には、札はさみ板と辺路札を用意するよう指示があるが、負俵・笠・杖などは「心まかせ」であって、納札以外は通常の旅姿であることがうかがえる。『守貞漫稿』にも、遍路姿は定めがないと記される。かつて、四国遍路の白装束は、江戸時代から続く習俗で、困難な旅に備える死装束であるとされてきた。近年、明治時代の絵馬や写真の発見によって、元来白装束を着用していないことが分かり、昭和初期に普及し、戦後に定着することが証明されている。以上から、歌舞伎・浄瑠璃作品に見える遍路姿は虚構と言える。

おわりに

河合氏によると、歌舞伎は現代劇であるという。制作当時の流行・事件をいち早く取り入れ、観衆を満足させる創作が必要である。歌舞伎・浄瑠璃作品には、近世社会の虚構と真実が詰まっている。四国遍路に関する作品は、上方の遍路ブームとともに登場し、ブームを先導した案内本の影響を受けていた。先行し、作者と観衆の身近にみられる西国巡礼が巡礼者のイメージとして定着して、四国遍路の演目にも取り入れられた。西国巡礼作品が全国的に好評を博すことによって、巡礼者のイメージが固定化し、後に四国遍路の白装束につながる可能性があること、逆に遠方にある四国遍路に修行的イメージが残ったことは、まさに虚構と真実と歴史の関係をよく表している。また、制作過程が判明すれば、歴史叙述はより豊かになるであろう。

最後に、当センターの目的には世界との比較研究もあるため、講演後のシンポジウムで閑哲行氏が指摘した「西洋のように王権や統治者が演劇を利用することはないのか」という重要な論点に触れておきたい。近世日本の現代劇である歌舞伎には、統治者への批判や統治者が忌諱する驕奢が含まれており、規制の対象であった。一方で、歌舞伎より古い歴史を有し、いわば古典劇である能は、幕府や大名たち武家の式楽とされ、城内には能舞台をしつらえ、年中行事はもとより、接待の席でも催され、大名自身が舞う、武家の教養でもあった。このように、近世日本の演劇（芸能）は二分化しており、大衆演劇とも言える歌舞伎・浄瑠璃作品の中に、庶民の巡礼である四国遍路が登場することは意義深い。

【参考文献】

- 河合眞澄「近世演劇にみる四国遍路」（四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』法藏館、2007年）
- 大浦康介「虚構の知恵・『ウソ』の効用」（『世界思想』38、2011年）
- 『歌舞伎座さよなら公演 第8巻』（小学館、2011年）。神楽岡幼子氏の御教示による。
- 武田和昭『四国辺路の形成過程』（岩田書院、2012年）
- 内田九州男「四国遍路—そのスタイルの諸特徴について—」（四国遍路と世界の巡礼研究会編『巡礼の歴史と現在』岩田書院、2013年）
- 塚本明・近藤浩二・胡光「巡礼と『道中日記』の諸相」（『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・シンポジウム プロシーディングス』、2014年）
- 胡光「四国靈場開創1200年の真実」（香川県立ミュージアム『空海の足音 四国へんろ展 香川編』2014年）
- 稻田道彦訳注『四国遍路道指南』（講談社、2015年）
- 今村賢司「西国三十三所巡礼と四国遍路（解説）」（愛媛県歴史文化博物館『四国遍路と巡礼』、2015年）
- 胡光「四国遍路と伊予の靈場」（愛媛県歴史文化博物館『四国遍路と巡礼』、2015年）
- 早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム
(http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/enpakunishik/results-big.php?shiryo_no=006-0004)